

強力な推進力となることは間違いないであろう。

Gordon Leff: *William of Ockham*

Manchester University Press, 1975. p. 666

坂 口 ふ み

この大著作の副題は *The Metamorphosis of Scholastic Discourse* という。いわば「スコラ学における語り口の変化」とでもいうことであろうか。この副題は著者のオッカム理解の中核をよく表現していると思われる。著者はオッカムを何よりもまずスコラ学者としてとらえ、唯名論者とか懐疑論者とかいうレッテルを拒む。オッカムをいわゆる「唯名論者」とすることへの批判は早くからあり、すでに1949年の *Franciscan Studies* 中の E. Hochstetter の “Nominalismus?” という論文がそれまでのオッカムの唯名論に関する論争を紹介し、特に1947年に刊行された R. Guelluy の *Philosophie et Theologie chez Guillaume d' Ockham* を批判して P. Viznaux の論文 *Le nominalisme au XIV^e siècle*, 1948 や著書 *Justification et Predestination au XIV^e siècle*, 1934 にくみしつつ、オッカムにおける概念や普遍が、客観世界や自然の構造に基礎を持つことを指摘している。Ph. Boehnen の諸論文もオッカムのこういう意味での実在論的経路に注意を向けている。「懐疑論」についてもたとえば1968年の *The New Scholasticism* では Fr. C. Richards が *Ockam and Skepticism* という論文で、オッカムの強く主張するのはむしろ外界の直接認識の明証性・不謬性であり、この意味では懐疑主義と対立することを指摘する。またオッカムが神の存在証明はじめさまざまな神学的論証を「論証」としてみとめなかったことも、彼の信仰に対する懐疑を意味するのではないことは、すべての論者のみとめるところである。

この意味では著者のこの主張は特に新しいとは言えないかもしれない。この書の特色は、オッカムの著作の全体を、「スコラの問題の彼なりの考え直し」であるとす

るこの視点で統一的に見直し、解釈しているその徹底性にあるのではないかと思われる。著者はオッカムをスコラの正統を継ぐ者として、つまり彼以前のスコラ学者たちと意図と方法を同じくする者とみる。その意図と方法とはやはり「信仰の知解」にはかならない。彼が信仰箇条のすべてを所与として受取り、その信仰を支えるためにあらゆるところで理性を行使することを著者は指摘する——オッカムにとり理性と信仰がある程度調和すると考えられるところ、たとえば第一保持原因としての神の考察等においてのみならず、理性と信仰が必ずしも調和せぬところ、たとえば神の本質とペルソナの区別の問題においてすら、オッカムは背理な理論の反駁と信仰への説得という形でこの努力を続けるのである。

しかし著者はもとよりオッカムによってスコラの流れの中にもたらされた大きな変革をみとめないわけではなく、それを著者は「語り口の変化」とみなすわけである。それは簡単に言えば形而上学的語り口から論理的語り口への変化である。オッカムにおける形而上学の欠如はしばしば指摘されるところであるが、著者はこの「語り口の変化」そのものをオッカムに特有の存在論の表現と見る。従って「オッカムの体系にすき間があるとすれば、それは彼が形而上学を説明しなかったという欠陥の内にはなく、伝統的に考えられた形而上学からの彼のずれが、形而上学にもたらした影響を説明しなかったことの内にある」と言われる (p. 335)。

そのオッカムの存在論とは、「完全に個的な存在論」*exclusively individual ontology* である。彼以前のスコラ思想家が何らかの形で普遍概念と存在とを関連づけようと努めたのに対し、オッカムははじめて個のみを实在とする存在論とそれに対応する個物認識優位の認識論とを確立したと位置づけられる。ただしそれによって普遍を無視するわけではなく、むしろ概念を实在から区別してそれらの独自性と差異を明らかにする思想と解される。ここではもはや普遍が何によって個体化するかが問題ではなく、逆に個のみの存在世界の中で普遍がいかにして成立ち、何であるかの説明が求められて来る。その意味でスコラの問題はオッカムにあって逆転する。存在と結合されていた普遍は、存在論から切り離された論理学の領域に移行し、類・種・本質等は相似性の関係に還元され、その関係も、普遍の問題も、*transcendentals* やカテゴリーも、すべて *predication* と *signification* の問題に還元される。ただし著者は論理学自体の領域におけるオッカムの貢献はあまり高く評価せず、ただ論理

学を道具とした語り方をオッカムにさせるに至ったその存在論・知識論による、神学問題の取扱いの新しさを評価している。

従ってこの書は第一部では、個の認識から出発して概念が、更に命題と推論が形成されるオッカムの知識論が詳細に扱われ、第二部はこの存在論と知識論の上に立って、神学的問題がオッカムによってどのように扱われるかが考察される。第三部ではいわばその延長または応用として人間と自然の問題が考察され、第三部最後の章（第十章）は著者によれば他の部分からはある程度独立的に、オッカムの政治的宗教的体制に関するフランスカンのような考え方を述べる。第三部は多分に抄論的であると著者ももめているように、重点は第一部と第二部におかれているので、主にその部分の内容を概括的に紹介したい。

第一部は単純認識を扱う第一章、概念と普遍を扱う第二章、タームとそのシグニフィケーションの仕方についての第三章、命題・推論・証明を扱う第四章と分たれ、個の直観認識から出発して次第に総合的・複合的になる知への歩みを辿る。第一章は主にトマス・スコトゥスなどと比較しつつ、オッカムが第一にして唯一の知の源泉とみとめる感覚的・知的直観認識と、それより生ずる知的な抽象認識の対比を、明証的と非明証的という点にしぼる。著者はオッカムがこのような直観知への余りに大きな信頼のために、知と感覚、存在の知と本性の知、等の間に存しうるギャップに無感覚であったことを批判しつつも、個のみが現実であり知の第一対象であるという主張を徹底的に貫いたことにより、存在の個体内と概念の普遍性をはじめて明瞭に対決させたことを評価する。興味をひかれるのは、オッカムの認識論でそれまでの認識論の *species* にとって代って、直観認識・抽象認識・記憶等を結合するのが、*habitus* の心理学であるという指摘である。

第二章はそれを受けて概念と普遍の何たるかを問題にする。まず概念が *fictum* であるか *intellectio* であるかの論争が扱われるが著者はそれには余り重きをおかず、知の働きの主体でもあり対象でもあるとする。もとよりスコトゥスの *formal distinction* の説はオッカムによって激しく攻撃され、個の個性はそれ自体根源的で説明不要のものとして、普遍はその個にかんする述語であり、それにより生み出される心内の *natural sign* であると特徴づけられる。著者はこれに関し、メンタルな秩序とリアルな秩序の峻別をオッカムの認識論・存在論の根幹とみるのである。第三

章では続いてその signification と supposition のさまざまな種類が扱われ、この理論により上に指摘された実在の exclusively に個的な性格が、真の知に要請される普遍的な性格との乖離の宥和が求められていることに注意が向けられる。ここにおいても著者は、オッカムのタームの論理学における significative と non-significative なタームの区別や、absolute signification と connotative signification の区別等が彼の存在論との関連を指摘しつづける。

第四章はオッカムにとってもそのみが真の知を与える、命題と推論とを扱い、彼がいかに必然的知の厳密性と限界に配慮したかが指摘される。彼にあっては自明な命題と共に偶有的で経験的な命題が証明を要せぬとされ、他のすべての真なる命題はこれらから推論されねばならない。その際オッカムが推論過程を意志の介入する時間的行為であるとしている点が興味深い。更にアリストテレスと違って神以外の事実に関する現在肯定命題は決して必然的たりえず、可能性の領域における条件的・仮定的又は否定的命題の形でのみ必然性を持ちうるものが、キリスト教信仰に基く論理の変化の一つとして示される。これはもとよりあらゆる被造物の偶有性という考えの、論理学への反映である。事実の論証不能性が厳密な意味での論証の中間の道として帰納が個の経験から普遍に達し得、明証的な直接経験命題と共に推論の前提を形成しうるが、それらも推論による結論の必然性と同じ必然性は持ちえない。

このような必然性の意味の狭めから、オッカムにおける論証妥当性の範囲はきわめて狭められることとなる。従って著者によれば、オッカムの論証の確実性への鋭い懐疑はむしろ経験による個物の認識の確実性への信頼と表裏をなしていると考えられる。

かかる知識論に立つと、神学は本来の意味の知を与えず、学でもない。なぜなら神学の真理はいずれも自明でもなければ直観的にも知られえず、またそれから導き出されるものでもないからである。それは信仰に基くものとして他の一切の知から区別される。メンタルな秩序とリアルな秩序を峻別したように、オッカムは信じられるものと知られるものをまきびしく区別するのである。神学は信仰に基く apprehensive habit であり、信仰を増すための inevident veridical habit である。ただしオッカムは彼の存在論と知識論に基いて彼の先行者たちの形而上学的神学の殆どを

しりぞけはするが、彼自身の結論はおしつめたところ神はそれ自身においては認識しえず、極度に抽象化された univocal な概念とその結合によって認識されるといふ、ある意味で伝統的なものである。神の存在証明に関しても、たしかにオッカムにとっては信仰の事実としての神存在は証明さるべきものではなく、むしろ神に関する語りの前提である点で前代の伝統とは切れるところがあり、かくしてオッカムは神の無限性の証明、目的因・作動因としての神の証明も否定するが、それにもかかわらず保持原因としての神の存在証明を試みているところにはスコラの伝統の持続がある。従ってむしろオッカムは、自然理性による信仰の支えを強化せんために理性の適用範囲を狭めたのであると著者は主張する（第五章）。

オッカムにとり従ってあらゆる神に関する言明は信仰箇条にあげられるその本性の一性・必然性・完全性と、その完全性より生ずる彼の行為の全き自由に基づく。そしてこれらは被造の偶有性・限界性とすどく対立させられる。オッカムはそれゆえスコラ学者としてはじめて、神自身の本質や属性やアイデア等神内部の差異に関する一切の理論をしりぞける。ただ本質とペルソナ、またペルソナの間の formal distinction のみは理性と有和しがたいとしつつも、信仰に基いて是認し、理性の不完全性をみとめるが、ここでも一性を強調して差異をミニマムに留めている。著者はこのようなオッカムにおける種々な神学問題の単純化を、またしても徹底的なリアルとメンタルの区別の存在論より説明している（第六章）。

第七章は神の esse から神の agere に話を移す。神の esse の完全性がそれに依存する不完全な存在との関わりにおいて見られる時、全能という語の下に集約されるさまざまな両者の関係が生ずる。無よりの創造・非存在の直観認識・予定・恩寵等々がそれである。神は万物の第一直接原因であり、potentia ordinata として他の二次的原因と共に、potentia absoluta としてそれらなしにも、つねに働き得、また働いている。この事実も、その原因性の自由性も、証明可能ではないが説得可能ではある。ただしそれらが神の完全性の働きとして背理や矛盾や悪を含む筈はないという制限は存在する。救いやその予定または恩寵や報いについても、ある種の道徳的因果性や恩寵の habitus と報いの因果性が、神の完全な自由と共存して語られる。結局のところでは神と人との関わり領域であらゆる中間者が、恩寵の habitus という中間者さえも排され、人間の意志による自由な行為とそれに対応する神の自由

な受容との関係が決定的なものとなされて来るのである。ただし完全な voluntarism という評はしりぞけられ、善き行為は正しき理性の命令と合致し、しかも実現の条件をそなえた目的を持つことが要請され、その正しき思慮が理性を導いて神の意志に従わせ、神子的徳の前提ともなる点が指摘される。従ってオッカムは客観的・道徳的価値を破壊するのではなく、むしろそれをスコトッスのように意志から切り離さぬところに特徴があるとも著者は説く。ここには個物の直観のオプチミズムに対応する、ある道徳的オプチミズムと、神の自由という考えが非連続に共存しているようにみえる。これは *potentia absoluta* と *ordinata* の区別に依存し、オッカムはこの二つを神の内でもリアルに別のものではないと主張しつつけるにしても、人間にとってパラドクスであることは否定しえない。オッカムの考え方のそれまでの伝統に対する主な脅威は、この神の意志の絶対性から来るのである。

以上が大凡の著者のオッカム理解のあり方であると思われる。これはきわめて詳細かつ入念なオッカム解釈の書であり、著者がみずから言うように、オッカムをオッカム自身から理解しようとした書である。従って歴史的コンテクストには重点がおかれぬ。それがこの書の長所でもあり限界でもあろうと思われる。著者があげるようなオッカムの思想の根本的特徴と、彼の時代環境、またフランシスカンの伝統の関わり合いに、もう少し光を当てて欲しかったと思うのは、ないものねだりのそしりをまぬがれないだろう。しかし、そうした場合たとえば著者自身もみとめるように、第十章の政治的問題が——もとより彼の哲学的・神学的理論との関連においては示されているが——他の部分から些か浮き上って来るというようなことは避けられたのではあるまいか。